

「定常型社会」という発想

戦後の日本社会は、企業、行政、経済、教育、人々の意識や価値観まで、あらゆる面において経済や人口規模の「拡大」ないし「成長」を前提にして「編成」され、またそうした目標に向けて一直線に進進してきた。現在の日本が多くくの面において閉塞状況にあることのかのりの部分は、こうした社会構造や発想そのものからの転換ができていないことに由来するといえるだろう。

私は、これからの日本社会の姿は、まずもって「定常型社会」ということに特徴づけられるものと考えている。「定常型社会」とは、簡潔にいうならば「経済成長ということを絶対的な目標としなくても十分な『豊かさ』が実現されていく社会」のことであり、「ゼロ成長社会」と言い換えてもよい。

なぜ「定常型社会」なのか？ この点は既に様々なところで論じてきたので簡潔な確認

にとどめるが（広井「二〇〇二」等参照）、基本的には、後であらためて述べるように経済成長の究極の源泉である「需要」——正確にいえば、市場経済において展開するような需要——貨幣によって測られるような需要——そのものが成熟ないし飽和状態に達しつつあるということである。加えて、関連する重要な要因として次の二点がある。第一は、高齢化ないし少子化という動きと不可分のものとして、日本の人口そのものが二〇〇五年から減少に転じているということである。第二は、環境問題との関係であり、資源や自然環境の有限性が自覚されるようになり、経済活動それ自体の持続性ということを考えても、経済の規模の「定常性」が「要請」されるようになったという点である。このように、定常型社会とは「少子・高齢化社会」と「環境親和型社会」というふたつを結びつけるコンセプトでもある。

こうした視点に立つて振り返れば、「成長がすべての問題を解決してくれる」と考えられ、かつ実際にそうだったのが戦後の日本社会だったといえる。そして、この「すべての問題」の中には、第一に社会保障など富の「分配」をめぐる様々な問題が含まれ、第二に、人と人の「関係性」のあり方、あるいは「共同体（コミュニティ）」のあり方をめぐる問題が含まれていたと考えるべきだろう。後者に関しては、戦後の日本社会とはすなわち農村から都市への人口大移動の時代だったわけだが、都市に移った日本人は、独立した個人と個人がつながりを作っていくという都市的な関係性を築くよりも、むしろ「カイシャ」

「核家族」という「都市の中のムラ社会」を作り上げていった。そして、自分や家族の利益を追求することが、イコール会社の利益、そして日本社会全体の豊かさにつながる、という予定調和的な状況が数十年にわたって続いたのである。

ここ十年あまり、構造的な経済の低成長に直面する中で、上記のような状況はすべて一変し、私たちは一気に二つの根本的な問題に向き合わねばならないことになった。一つは「経済が拡大・成長を続ける」という前提が維持できない社会への、基本的な発想（及び社会システム）の転換であり、もう一つは、先ほどから述べているような「新しいコミュニティ」というもの、つまり「自立した個人が互いにつながる」というような、従来のムラ社会的な共同体とは異なる関係性を、私たちはどうやってつくっていくのか、という課題である。この話題は後の「コミュニティ論」のところで正面から取り上げたい。